



GLOBAL
NEXTLEADERS
FORUM

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム

2020 年度活動報告書

2021 年 3 月

目次

1. 会頭挨拶	・ ・ ・ ・	p.2
2. 組織概要（2020 年度）	・ ・	p.4
A) 理念	・ ・ ・ ・	p.4
B) 運営メンバー	・ ・ ・ ・	p.6
C) 体制	・ ・ ・ ・	p.7
3. 2020 年度事業報告	・ ・ ・ ・	p.8
A) 概要	・ ・ ・ ・	p.8
B) 参加大学一覧	・ ・ ・ ・	p.9
C) 議題・構成	・ ・ ・ ・	p.10
D) 実施内容報告	・ ・ ・ ・	p.11
4. 収支報告	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	p.24
5. 連絡先	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	p.25

1. 会頭挨拶

日頃よりグローバル・ネクストリーダーズフォーラム（GNLF）に多大なご支援やご指導をいただき、心よりお礼申し上げます。今年度の GNLF は、2020 年 3 月の実質的な始動より 1 年にわたってコロナ禍の中での活動を継続してまいりました。この度、今年度の事業が無事に終幕し、団体として来年度に向けた新たな体制へと移行する運びとなりましたことをここにご報告します。

GNLF は次世代のリーダーを輩出するプラットフォームとなることを目指して 2010 年に設立され、世界各地から招いた学生とともに年に一度の国際フォーラムを開催してまいりました。節目の第 10 回を迎えた今年度のフォーラムでは、「社会と科学技術」をテーマに据え、9 つの国と地域より集った 50 名を超える学生が議論を行いました。2021 年 2 月に実施した本事業の内容は 8 ページ以降の「3. 2020 年度事業報告」に詳述しております。

国内外における新型コロナウイルス感染症の流行の影響を受け、GNLF も世界的な趨勢に沿う対応を余儀なくされ、「定例会議のオンライン化」と「フォーラムのオンライン化とそれに伴う会期・内容の大幅な変更」に大別される先例のない活動形態を導入しました。

「定例会議のオンライン化」は、3 月の新体制発足当初に Zoom を導入して以来継続している活動形態です。すべてをオンラインで実施したため、年度の初頭に加入したメンバーの多くとは未だに直接会うことができていないなど、メンバー間で親睦を深める機会が例年よりも少ないという問題点は感じられます。しかし、運営に必要な話し合いや準備はある程度までオンラインで代替できることが分かったため、感染症流行下に限定した対応としてではなく、その後の活動形態を検討するうえでも有力な選択肢を獲得したと言えると思います。

「フォーラムのオンライン化とそれに伴う会期・内容の大幅な変更」に関して、例年 10 日間程度の宿泊イベントとして実施している事業は、二転三転を経て、2 月の土曜・日曜の 8 日間にわたって日本時間午後 8 時から 10 時までという形で実施しました。当初は約半年の延期を主要な選択肢として検討していたものの、会計年度をまたぐために資金集めが振出しに戻ってしまうことや、学生団体としてのサイクルに悪影響が生じることなどの運営上の理由に加え、感染症の流行状況に鑑みて延

期後の実施が不確かであるとの判断から、オンライン開催という結論に至りました。また、海外の学事暦やオンライン会議の特質を考慮し、週末の日本時間夜に1回2時間の実施としました。さらに、例年のフォーラムで取り入れているフィールドワークなどのアクティビティを割愛し、比較的コミュニケーションが取りやすいグループディスカッションの比重を増やすなど、オンライン会議に適した形態を目指しました。

結果として、例年見られる親密な交流は縮減せざるを得なかったものの、参加者からも好意的な評価を多く受けることができ、時勢にかなった形態で有意義な事業を実施できたと自負しております。こうした活動は、ご後援やご寄付をいただいた皆さまや様々な形でご協力くださった先生方のご協力なくしてはなしえなかったことであり、改めて感謝申し上げます。

最後になりますが、会頭の座は今月をもってメンバーの長満和樹によって引き継がれ、GNLFは来年度の事業に向けて再始動することとなります。先の読めない状況は続くようですが、交流の場を作り出す活動を継続していく所存です。引き続き温かいご支援・ご指導をいただけますようよろしくお願い申し上げます。

2021年3月
2020年度会頭 和久井 亮

2. 組織概要（2020 年度）

A) 理念

団体理念

グローバルリーダーを創出する。グローバルリーダーとは、国際社会という枠組みにおいて、団体としての方向性を決定し仲間に共有し、集団としての行動を統合し統御できる人物である、と私たちは考えます。リーダー育成の活動の軸として、GNLF では毎年東京で本会議を開催します。本会議とは、GNLF の日本の運営メンバーが主催する年一度の国際学生会議です。

目的

他者理解による自己像の認識を本会議の目的とし、それを通じてグローバルリーダーの創出を達成したいと考えております。他者と深く交流し他者を理解することは、自分を知る契機となります。他人が自分をどのように捉えるかは人によって異なるため、価値観やバックグラウンドの異なる人と接することで、他人の自分に対する評価を知ることができます。この学びから、他人に信頼されるにはどのような言動を起こせば良いのか、またどのように自分の長所を活かし短所を克服することで他人に信頼されるかを知ることができます。他人から信頼を得ることはリーダーに不可欠な要素の 1 つです。このような他者理解の機会を本会議という形で経験することでグローバルリーダーに必要な他人からの信頼感の得方を身につけることができます。

特徴

GNLF の本会議の特徴は 2 点あります。

○ 多国間の枠組みであること。

政治的、経済的影響力の大小に関わらず様々な地域の様々な規模の国の参加者を募ることで、会議での前提が先進国視点、大国視点に寄らないよう綿密に参加国が選定されています。一般的に先進国からの参加者に偏ってしまうことの多い国際会議の中で、グローバル・ネクストリーダーズ・フォーラムは他の国際会議と一線を画しており、国の規模にかかわらず様々な国の参加者と交流することができます。

○ 1 つのテーマを多角的に考察するやり方を学ぶことができること。

毎年 1 回開催される本会議において 1 つのテーマを決定し、そのテーマにそくしたセッションを行うことで様々な角度から 1 つのテーマについて考察することができます。そのテーマについての見識を深めることができるだけでなく、1 つのテーマが与えられそれについて考察を加えていく際、どのようにそのテーマへの学びを深めることができるのかという学びの過程を経験することで、今後の学びでも多いに活用できます。

B) 運営体制

顧問

- ・ 遠藤 貢（東京大学大学院総合文化研究科教授）

第11期（2020年度執行代）メンバー

- ・ 亀田 義勝（広報／東京大学2年）
- ・ 河野 妃南（渉外／東京大学2年）
- ・ 渋谷 拓海（東京大学3年）
- ・ 関根 友里（プログラム／東京大学2年）
- ・ 谷口 朋（東京大学3年）
- ・ 田村 裕加（総務／東京大学2年）
- ・ 六川 雅英（財務／東京大学2年）
- ・ 和久井 亮（会頭／東京大学2年）

第10期メンバー

- ・ 大里 優佳（東京大学3年）
- ・ 阪口 友貴（東京理科大学4年）
- ・ 陳 遥知（東京大学3年）
- ・ 松本 泰平（東京大学3年）
- ・ 矢野 未菜（東京大学3年）

第12期メンバー

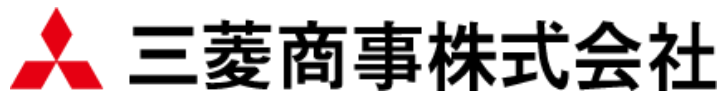
- ・ 大谷 朗子（東京大学1年）
- ・ 金 主熹（早稲田大学2年）
- ・ 細郷 有希乃（東京外国語大学1年）
- ・ 境 祐介（創価大学3年）
- ・ 田中 迅（九州大学4年）
- ・ 長満 和樹（東京大学1年）
- ・ 村上 友哉（東京大学1年）
- ・ 山本 つかさ（東京大学2年）
- ・ 横山 未侑（東京大学1年）

C) 後援体制

特別後援



寄付



3. 2020 年度事業報告

A) 開催概要

開催期間

- ・ 2021 年 2 月 6 日～28 日
（上記期間中の土曜日・日曜日の日本時間午後 8 時～10 時）

開催地

- ・ オンライン会議室（Zoom を使用）

主催

- ・ グローバル・ネクストリーダーズフォーラム

参加者の出身国・地域

- ・ 2019 年度事業と共通する国と地域：スロバキア、台湾、チュニジア、日本、パキスタン、ハンガリー、メキシコ
- ・ その他：ブラジル、ペルー

参加者の内訳

- ・ 運営メンバー：20 名（日本の大学生）
- ・ 日本の学生参加者：2 名
- ・ 海外出身の学生参加者：29 名
- ・ 一部参加国の教員：6 名
- ・ 合計：57 名

B) 参加者の所属大学一覧

- Carthage University
- Fundação Getúlio Vargas Rio de Janeiro Law School
- Institute of Business Administration, Karachi
- International Christian University
- Keio University
- National Autonomous University of Mexico
- Pontifical Catholic University of Paraná
- Selye János University
- Soka University
- Tamkang University
- University of Pannonia
- University of São Paulo
- University of Tunis El Manar
- University of Vienna

C) 議題・構成

議題：社会と科学技術

議題設定理由

現代、急激に進化を続ける科学技術は社会の隅々に行き渡り、私たちの生活をより豊かで便利なものになっている。一方、それは同時に人間、環境、世界に対して脅威を与えてもいる。これらの問題は、一国や一分野だけでは完結するものではない。この問題に適切に対処するうえで、世界中から集まった様々な背景を持つ学生が多角的な視点から科学技術について議論を行うことは大きな意義を持ち、科学技術のさらなる発達が見込まれる世界を生きていく学生にとって特に意味がある議題だと考えた。

狙い

GNLF の理念は未来のグローバルリーダーを創出するプラットフォームを提供することである。科学技術が現在よりも発達しているであろう時代に世界で活躍することが期待される学生が、まさに議論が行われている科学技術と社会に関する問題について話し合うことは、自分とは異なるアイディアや今までに触れたことのない価値観などについて意見交換の中で理解を深めることができる貴重な機会となる。実際に世界中から集まった参加者は国や文化、信条などによって独自の考えや価値観を持っているため、新たな知識を吸収することができ、将来それらの問題に取り組むにあたり一つの助けとなると考えられる。

本会議の構成

本会議は4つの部で構成されている。第1部では、科学技術の二面性についての再認識を行う。科学技術が社会に与える脅威について第2部と第3部で具体的に扱う。第2部では長期リスクなど開発と責任に関する問題を、第3部では人間と生命にかかわる倫理的な問題をテーマとし、科学技術と社会との関係を深く考察することを目的とする。第4部では何のために科学技術を進歩させるのか、その目的について議論を行う。

D) 実施内容報告

フォーラムは以下のような日程で各日日本時間午後 8 時から 10 時にかけて実施した。

- ・ 2 月 6 日（土） 前半：開会式、後半：第 1 部
- ・ 2 月 7 日（日） 第 1 部
- ・ 2 月 13 日（土） 第 2 部
- ・ 2 月 14 日（日） 前半：第 2 部、後半：文化交流会 1
- ・ 2 月 20 日（土） 第 3 部
- ・ 2 月 21 日（日） 前半：第 3 部、後半：文化交流会 2
- ・ 2 月 27 日（土） 第 4 部
- ・ 2 月 28 日（日） 前半：第 4 部、後半：閉会式

① 開会式

フォーラムの冒頭には開会式を行った。内容は以下の通りである。

- ・ 会頭挨拶（会頭・和久井亮）
- ・ プログラムの概要の説明（プログラム局長・関根友里）
- ・ 諸注意（渉外局長・河野妃南）
- ・ 参加者自己紹介
- ・ アイスブレイク

会頭からは、団体の歴史や異例の状況下でオンライン開催となった今大会の意義について考えが述べられた。プログラム局長からは 4 週にわたるフォーラムの問題意識や構成について説明がなされ、渉外局長からは Zoom 利用の際のマナーなどについて話があった。

参加者の自己紹介は、基本的に事前に提出された PowerPoint ファイルの画面と音声を共有することで実施した。約 30 名の学生と 6 名の教授がそれぞれの専門分野などについて順に発表した。

アイスブレイクは、その後のグループディスカッションの練習もかねてブレイクアウトルームを使用し、自由に懇談する時間とした。それぞれが専門とする分野などを紹介し合ったり、感染症流行下での生活について意見を交わしたりしていた。

② 第1部 科学技術と社会の変化

前半

目的

第1部の前半では、自分たちの社会を変える科学技術に対して、どのような考えを持っているか、そして、次々と変化していく科学技術に対して、どのように向き合っていくかについて再考することを目的とした。会議の最初のセッションにあたるため、内容的にも取り掛かりやすいテーマを扱うことで参加者の会議に対するモチベーションを高めることを想定した。

実施内容

社会を変える科学技術の中で、身近な例として人事試験における人工知能を用いた面接の導入、そうでない例として人工知能の軍事技術の使用という2つの人工知能の応用を取り上げ、参加者に5人程度のブレイクアウトルームで議論してもらった。人工知能面接の導入の面においては、今後、自身が経験し得る可能性を考慮して人工知能をどこまで受け入れていくのかを軸にして考えた。一方、軍事技術の使用の面においては、人工知能が次々と導入されていく中で社会がどのように変化していくかを軸に考えた。

手応えと反省

最初のセッションにしては各人が議論に参加しており、成果は十分にあったといえる。議論をするためにブレイクアウトルームに分ける際、設問ごとにメンバーを変えたことで、参加者同士の交流が促進できたと考えられる。参加者同士での議論は円滑に進めることができたといえるが、議論に入る前段階で2つの科学技術に関する情報を説明した際、事前準備に余裕がなかったために司会者の英語が詰まることがあった。セッション後の参加者のアンケートでも一定の評価があることから、総合的にはある程度の手応えはあったといえるだろう。

第1部 後半

目的

これからの会議で科学のことを考えていくうえでの根本・前提とすることを意識し、知識や定義、科学の性質について再考させ、科学の本質に迫ることを目的とした。個別の事例も利用しつつ抽象的かつ広い内容を普遍的に網羅した。また、最初のパートかつオンラインミーティングなので、なるべく多くの人と話す機会や各国のことを知ることができるような工夫も心がけた。

実施内容

2つのセッションを実施した。

まず、科学技術の例を2つ取り上げ、それぞれに対して推進派・反対派のチームに参加者を振り分け、チームごとに作戦会議を行ったうえでチーム間で討論を行った。これについては事前課題として事例の正負の側面と各国の事情について調べてくることを要求していた。その後、科学技術の二面性について確認し、理想的な科学技術のあり方について考えた。

続いて、科学技術が「役に立つ」ことの定義について話し合うために、定義の一例を提示しそれをベースにそれぞれが考える定義の共有を行った。

手応えと反省

各グループで議論が盛り上がり、成果はあったと考えられる。事前課題を設定したことにより各国の事情を共有できたことと、グループを入れ替えてのディスカッションセッションを多く設けたことにより、多様な意見や文化背景、人との交流ができたとの声があり高評価を得られた。ただ、1つ目のセッションでグループの人数やメンバー構成によっては議論が停滞した場面もあったようなので、オンラインミーティングではその辺りの工夫も重要になってくることを実感した。

③ 第2部 開発と責任

目的

3つのセッションからなる第二部では、「開発と責任」を小テーマに掲げることで、人類が科学知を技術に応用することで加速させてきた開発と、その所産として拡大していったリスク、責任について、時間的・空間的広がり意識しながら検討し、将来性を持った視座を会得することを目的とした。

セッション1

実施内容

放射線医学総合研究所より北川敦志先生をお招きし、専門家の視座から原子力にまつわる講義をしていただいた。放射線や放射能の定義といった基本的事項に始まり、同研究所の成り立ちから日本や世界と原子力技術との歩みを紐解いていった。更に、主要な原子力施設の事故とその処理過程から長期的リスクとの向き合い方について述べられた。

講演者紹介

北川 敦志先生 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構
量子医学・医療部門放射線医学総合研究所技術安全部長



昭和61年大阪大学理学部物理学学科卒業。同大学院に進学し、不安定核ビームを用いた実験原子核物理学を専攻。カリフォルニア大学ローレンス・バークレー研究所において日米共同実験に参加。平成4年理学博士号取得。ローレンス・バークレー研究所はネオン線による重粒子線がん治療の臨床試験

を世界で初めて実施中であり、原子核物理学の医学応用に機縁ができる。在学中の平成元年、重粒子線がん治療装置建設のため科学技術庁放射線医学総合研究所（現量子科学技術研究開発機構）客員研究官に招聘。科学技術特別研究員を経て、平成6年研究員に着任、現在に至る。主たる専門分野は、イオン生成及び不安定核ビームの生成及びその医学応用の研究開発。平成16年文部科学省研究振興局量子放射線研究課専門官。平成18年より令和元年まで重粒子線がん治療普及推進室長として重粒子線がん治療の普及活動、人材育成等にも従事。平成29年より研究企画室長、平成31年より人材育成センター長、令和3年より現職。

手応えと反省

既存の知識量の差から、講演内容をスムーズに理解できた参加者がいた一方で苦戦した参加者も見られた。しかし正確な理解が難しい「原子力」という分野について基礎的な知識からリスクコントロールの話まで包括的に扱ったことで、その後の議論の土台が形成されたように見えた。活発な質疑応答もあり、実りの多いセッションであった。

セッション 2

実施内容

北川先生の講義を受け、セッション2ではなぜそもそも長期的リスクを考える必要があるのか、また誰にその責任があるのかについて議論を展開してもらった。私たちは社会全体が長期的リスクを考慮しているからしなければいけないのか、また企業は将来世代に安全を保障するために長期的リスクを考慮しているのかなど、話し合いの上で根本的な原因について考察した。

手応えと反省

全体を通して答えが明確ではない、参加者自身の答えを見つけてもらうような質問が多かったため滞りなく議論が進んでいたという印象を持った。また参加者の中では講義でインプットしたものをこのセッションで引用しながら話していた様子も見られたため、思う存分アウトプット出来たのではないかなと思う。

セッション 3

実施内容

世代間倫理における議論を紹介しつつ、将来世代に対する責任について考察した。非互惠性問題や非同一性問題、世代を超えた価値観共有の非自明性といった条件のもとで、「なぜ将来世代の権利・利益を擁護しなければならないのか」という問いについて議論を行い、グローバルリーダーとしての視座を養った。

手応えと反省

応用倫理学における専門的な議論を扱ったため、時間的制約と併せて内容理解の難しさが心配されたが、活発な議論が起こっていた。思考実験や投票機能を用いて直観の分析を基軸に据えた点も好評であった。環境問題をめぐる現在のリーダーと若者世代との対立や、脱物質主義的価値観に触れる参加者がいた点も興味深かった。

総括

原子力利用に関する講義に始まり倫理的側面を扱うなどテーマ理解を必要とする構成であったが、総じて参加者の間で活発な議論が見られた。あまり日常で扱わない題材ゆえに新たな視点を得られたとの感想を述べる参加者が多かった一方、専門的で複雑なトピックである分、参加者の議論への積極性や議論の深度に差が出たことは否めない。しかし同時に、投票等オンラインならではの機能を活用できたことも今後のセッションの質向上に繋がるだろう。

④ 文化交流会 1

ブレイクアウトルームに分けて各参加者が手元に用意した食べ物・衣装や写真を披露し合う交流を行った。参加者からは非常に満足度が高いという声が多く寄せられた。中には話が盛り上がりを見せ、もう少し時間がほしかったという要望もあったが、グループ内で発言ができなかったメンバーがいることはなく、皆それぞれで準備した食べ物や写真について話す時間は十分に与えられた。また、各セッションではメンバーが毎回変わるので名前と顔が一致する人は少なかったが、初めて参加者の名前を覚えまた知ることができて有意義な時間になったと思う。

⑤ 第3部 人間と生命

前半

目的

医学の発展で延命治療が可能となった一方で、合理主義や人道主義が個人の命に関する決断を尊重する考えをもたらした。前半では安楽死を取り扱い、それぞれの死生観や法的・社会的な背景を認識することで、個人の意思に反して生の終わりを迎えることの問題について議論した。

実施内容

導入として死生観を感覚的に話した後、安楽死に関する議論の歴史的遷移を振り返り、現在安楽死や尊厳死がどのように参加者の国々で受け止められているかを共有した。次に導入の賛否両論を理解した上で、異なる身体・精神的な問題を抱えた人々について安楽死を認めて良いと思える条件を話し合い、宗教的に否定的な人から積極的に認める人まで多様な見解を得た。最後に個人の人生における決定権について望ましい形を考え、個人の自由尊重が理想的だが同時に法律などの規制も必要であるという意見が多くみられた。

手応えと反省

どこのグループも運営メンバーのファシリテーションを中心に活発に議論が進んでいたと思う。一方で安楽死というデリケートな内容故なのか、参加者が普段より少なかったのが心残りである。班を後半は同じにしたため、議論の流れを踏まえながらディスカッションをすることで互いの理解が深まったのではないかと考えている。司会が共同ホストになっていなかったために投票結果を見ることができなかった点が反省点である。諸所改善点は見受けられるが、全体としては普段は話題にしにくいものを話題にする良い機会になったと思う。感想もポジティブなものばかりで満足している。

第3部 後半

目的

私たち人間は動物実験によって一定の安全性が担保された薬などの技術が利用できる一方で、多くの動物が犠牲になっている事実がある。後半ではこのことについて、開発する技術の人間への影響の大きさを考慮しながら、人間の生活をよりよくする技術の開発のために動物実験が行われることについて考えを深めた。

実施内容

まず具体的なイメージを持ってもらうため、動物実験が行われている事例を全体でいくつか共有した。その後、日本では医薬品開発においてヒトでの臨床実験の前にヒト以外の動物実験が行われていることに着目し、この過程の正当性について議論した。その上で、日用品に関する動物実験に対する意見をグループで共有した。ここまでの議論を踏まえて動物実験は各自の価値観や文化の反映される複雑な問題である一方、国際的な対応が求められることを示して、どのように世界規模で統一した基準を打ち出すことができるか、話し合った。最後に動物実験は感情的な議論が先行しやすいが、世界規模で問題解決を図るには、他の意見も尊重しながら論理的な議論を重ねることが重要であると示してまとめとした。

手応えと反省

全体的に活発な議論が行われており、またほとんど全員に発言の機会があったようで良かったと思う。Google ドキュメントでメモをとりながら議論する形としたが、メモをとっていると議論に参加しにくくなるとの意見も出た。この点については Jamboard などを使えばもう少しメモの負担を減らせたのではないかなと思う。内容に関しては、各国の文化や宗教、価値観が反映された議論となったとの声があった。この点を事前に考慮し、動物実験に関する合意形成の難しさそのものに焦点を当てたことで、建設的な議論が実現できたといえる。一方で、例や説明を増やした結果、導入に時間がかかってしまった。メリハリをつけた情報提供でディスカッションに時間を回せたら良かったと思う。

⑥ 文化交流会 2

異文化に対する理解を目的にクイズ大会を行った。各国の参加者が自国に関するクイズをそれぞれ2問ずつ用意し、プレゼンを行った。参加者の回答はアプリを用いて集計をし、最終的に上位であった10名程度には景品を送った。景品があることもあり、参加者の積極的な参加が見られた。

オンラインでのクイズ大会という性質上プレゼンター以外の参加者が発言することが難しく、交流という点において問題があるかと懸念していたが、チャット機能を用いて積極的に交流する姿が見られた。反省点としては、運営側の想定より早くクイズ大会が終わってしまったことがある。しかし、余った時間をブレイクアウトルームを用いて少数人での談笑の時間にすることで、クイズについての感想を共有する場を設けられ、結果的に成功した。議論の中にクイズ大会のような娯楽イベントを開催することで、文化の交流だけでなく、適度な息抜きとしても機能していた。

⑦ 第4部 科学技術の目的

前半

目的

良い面と悪い面の二面性を持つ実現後の科学技術に対して持つべき責任や担うべき役割とは何なのか、誰がそれらを負うのかを、原子力発電所の事故などの具体例を用いて考えてもらうことにした。さらに政治家や政策決定者が科学技術にどのように関わりを持つのか、持つべきなのかについても議論を行ってもらうことにした。各々が自分の専門分野の科学技術への関わり方を考えてもらうことを目的とした。

実施内容

二面性を持つ科学技術を挙げてもらい、具体例を交えつつ科学技術の二面性への対処法を考えてもらった。次に原子力発電所の事故という具体例を出し、多くの別々の専門を持つ専門家が協同することを確認し、研究者や専門家の社会における役割を考えた。最後に科学と政治の関わり方について、双方の立場から考える疑問を投げかけた。

手応えと反省

最終週ということで包括的な内容を扱ったため、様々な意見が出る問いを適切に結論づけることは難しかった。逆に、似通った意見が多く出た際の議論の展開も大変であったと思われる。しかし、社会科学を専門とする学生や法科の学生などを中心にある程度方向性を持った議論ができたと思う。

第4部 後半

目的

計画段階の、つまり実現前のテクノロジーを実現に移す前に考慮しなくてはならない事項の1つとして、その計画中のテクノロジーは本当に必要だろうかという問いがあげられるので、日本のリニアモーターカーの例を出しながらテクノロジーの必要性について考えてもらうことを狙いとした。最後には、フォーラム全体の総括として、テクノロジーはどうして必要なのか、また理想のテクノロジーを各個人に考えてもらうことを目的とした。

実施内容

リニアモーターと新幹線の例を出し、リニアモーターカーの利点と問題点を説明した後、リニアモーターカーは本当に必要だろうかという問いを投げかけました。3つ目の問いでは、テクノロジーの必要性、存在意義について再検討する機会となる問いを投げかけた。

手応えと反省

リニアモーターカーの例が日本特有だったのであまり馴染みのない話題だと思った参加者もいたと思われる。限られた時間で日本の新幹線に加えてリニアモーターカーを作ろうとしているという話の流れを伝えるのは難しかった。ただ、最後の問いで、テクノロジーの必要性、存在意義について再検討する機会となる問いを投げかけた際には、コロナの状況を鑑みながらテクノロジーがどういう存在なのか議論していたグループがありいい機会を与えられたと思う。

⑧ 閉会式

8日間のフォーラムを締め括る閉会式は、多大なお力添えをいただいた東京大学駒場友の会の事務局長を務めておられる村松教授ご臨席のもとで実施した。式次第は、代表の閉会の挨拶、プログラム統括による全体総括、参加者スピーチ、教授のご講評、記念品紹介、スポンサー紹介と盛りだくさんだった。

4名の参加者からのスピーチでは、本フォーラムにおいて「科学技術」をテーマとして扱った点について特に言及が多くあった。所与のものとして受け身になりがちな科学技術をセッションで深く扱ったことで、今まで考えたことがなかった問いによる醒覚や意見の異なる人とのディスカッションの快味を経験してもらえたようだった。

閉会式にご出席いただいた3名の教授からは、イレギュラーな年におけるフォーラム開催への労いと参加者に対する今後の期待のお言葉をいただいた。

最後に全員で撮った写真の参加数と笑顔がオンライン開催という難しさを越えてフォーラムが期待以上のものになったことを物語っているように感じられた。



△記念写真

4. 収支報告

一般社団法人 グローバル・ネクストリーダーズフォーラム 2020年度事業収支決算

収入の部			
参加者負担			
参加国	参加費	人数（現状）	収入(現状)
スロヴァキア	¥1,413	1	¥1,413
台湾	¥1,413	1	¥1,413
チュニジア	¥1,413	3	¥4,239
パキスタン	¥1,413	6	¥8,478
ハンガリー	¥1,413	6	¥8,478
ブラジル	¥1,413	4	¥5,652
ペルー	¥1,413	1	¥1,413
メキシコ	¥1,413	7	¥9,891
日本（一般参加）	¥1,413	2	¥2,826
教員（伯洪墨パ）	¥0	5	¥0
日本（運営）	¥0	23	¥0
小計	59名（うち参加者36(5)名）		¥43,803
助成金収入			
財団名			収入
	小計		¥0
企業協賛収入			
企業名			収入
	小計		¥0
寄付金収入			
団体名			収入
三菱商事株式会社			¥100,000
一般社団法人 東大駒場友の会			¥100,000
	小計		¥200,000
運営拠出金			
項目			収入
運営拠出金			¥0
	小計		¥0
雑収入			
項目			収入
利息（2020年8月、2021年2月）			¥6
	小計		¥6
	当期収入合計(A)		¥243,809
	前期繰越収支差額		¥29,223
	収入合計(B)		¥273,032

2021/7/9

担当者：六川雅英（財務担当）

支出の部			
旅費			
A.海外参加者渡航費			
参加国	人数	補助額(USD)	費用
	小計		¥0
B.日本国内旅費			
項目			費用
			¥0
	小計		¥0
食費・宿泊費			
A.宿泊費			
項目	単価	人数	費用
	小計		¥0
B.食費			
項目	単価	人数	費用
	小計		¥0
研修会場費			
項目	単価	日数	費用
	小計		¥0
企画費			
項目			費用
修了記念品			¥52,589
参加費免除			¥43,803
	小計		¥96,392
雑費			
項目			費用
印刷費			¥13,831
謝礼			¥0
サーバー維持費			¥28,028
通信費			¥26,392
事務用品			¥494
手数料			¥1,650
印紙			¥600
	小計		¥70,995
当期支出合計(C)			¥167,387
当期収支差額 (A)－(C)			¥76,422
来期繰越収支差額 (B)－(C)			¥105,645

5. 連絡先

本報告書に関するお問い合わせは下記連絡先へお寄せください。

住所

〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-6 アトラスビル 6F IBIC 本郷内

E メールアドレス

gnlf-hq@g-nextleaders.net

公式ホームページ

<http://jp.g-nextleaders.net>

団体 Facebook ページ

<https://www.facebook.com/GlobalNextLeadersForum/>

団体 Twitter

<https://twitter.com/gnlfjapan>